

〔看聞日記〕永享五年八月廿九日、抑自廿五日彗星出現云々、未見室町殿御驚云々、九月一日、彗星今夜初見之、西方成間有尾、其色白、占文未見、三日、抑彗星占文在方進之、

今月廿五日昏戌時、彗星見酉與戌之間、在尾度、近貫索其色白、天地瑞祥志云、彗星者惡氣所生、闇亂不明貌也、故除舊布新象也、天文要錄云、彗星出其國、更政立王公、斑固云、彗星出國、暴兵起、移其國、京房易傳云、彗星出、四夷來、兵革起、死人如亂麻、哭聲遍野、內經云、彗星其色白爲喪、又云、秋彗星見西方爲兵、又云、彗星見其歲五穀盡傷、有飢疾、

永享五年八月廿七日

正三位賀茂朝臣在方

條々凶事驚存

〔台徳院殿御實紀附錄五〕いつの比にか、彗星北方に現れしかば、騷亂の兆なりとて、世にいひもてなやむを聞玉ひ、人々よく考へみよ、大空の中にか、一星が出て、その兆は何くの國にあたるなどいふは、兒童の見なれ、善惡とも天に現るほどならば、世人なにをもてのがるべきと仰られて、少しも御懸念の様おはしまさゞれば、いづれも安意せしとぞ、むかし晉の孝武帝の時、長星の現れしをみて、長星汝に一盃の酒をす、むいにしへより萬歳の天子なしといひしにくらべ奉れば、公の天命に安じ、御身に立反り玉ひて、御自修ありしは、いと及びがたき御事にぞ、

〔紫芝園漫筆八〕壬戌〇寛保二年正月、彗星見於河鼓南及河鼓、是歲八月一日、大雨大風、自東北拔木發屋、

信、上下毛武、下總五州大水、朝馬山崩、信之松城、小室武之忍城、河越、磐築、下總古河、關宿諸城皆壞、松城、小室最甚、所在堤防無有完者、人民溺死者不可勝數、則東都之地、北接下毛、東連下總、平地水深丈餘、其淺者亦數尺、渺々如海者方二三百里、都下東北二十里內、士民或遁於高地、或上屋以待、援有、幸得船筏而濟者、有數日不得援而絕糧者、其他爲魚鼈者、亦不可勝數、不惟衆庶爲然、諸侯貴人亦有死者云、於是縣官命有司出舟、以濟溺者、爲粥飯、以饋飢餓者、都下富人有力者、亦競赴援、施惠不可具